[ブーケ]

bouquet

教育芸術社

NIPPON MEGURI

日本めぐり

本連載では、日本各地で文化や芸術を支えている方々を取材します。
第９回は栃木県足利市の「あしかがフラワーパーク」を訪ね、
パーク管理部本部長の長谷川広征さんに、「花の魅力を学校現場に届ける」をテーマとして、
大藤の魅力や花と人との関わりについてお話を伺いました。

第９回　栃木県足利市
あしかがフラワーパーク
長谷川広征・執行役員パーク管理部本部長

長谷川広征（はせがわ・ひろゆき）

あしかがフラワーパーク執行役員パーク管理部本部長、樹木医（その他、自然系の資格で森林インストラクター、森林セラピスト、ネイチャーゲームリーダー）。前職で携わった小売業が、植物との出会いのきっかけとなる。人と人のつながりを広げてくれる植物に魅力を感じ、2000年にあしかがフラワーパークへ入社。主に、植物の管理や樹木の診断、土壌に関する業務に従事している。また、入社以来、イルミネーションにも携わり、主にデザインやストーリーに関わる部分を20年以上担当している。

あしかがフラワーパーク
〒329-4216 栃木県足利市迫間町607　☎TEL：0284-91-4939

入園料　花の咲き具合により料金が変動します。詳しくはお電話にてお問い合せください。
開園時間　季節により変更になります。詳しくはお問い合せください。
開園期間　定休日はございません。但し、２月第３水、木曜日と12月31日は休園とさせて頂きます。※機器点検等の為、休園とさせて頂く場合がございます。

今回訪れた栃木県足利市は、室町幕府の将軍家足利氏発祥の地として知られ、
足利氏ゆかりの寺社が点在する街並みは、「東の小京都」とも称されます。
四季折々の花が咲き誇る花の楽園「あしかがフラワーパーク」は、
大藤などの華麗な樹木や草花によって季節感あふれる庭を園内につくり込んだ、
栃木県を代表する花のテーマパークです。

花と光の楽園をつくる

── 長谷川さんはふだんどのような業務をされているのですか？

長谷川：私は園全体の責任者という立場で、植物の管理、イルミネーションのデザインやプログラムに関する業務のほか、樹木医として樹木の健康管理を担当しています。樹木あっての植物園なので、まずは木の健康を第一に、そのうえで他の草花やイルミネーションの管理等に努めています。

── あしかがフラワーパークの魅力はどのようなところでしょうか？

長谷川：当園は、年間を通してお客様に楽しんでいただきたいという思いのもと「８つの花のステージ」と題し、季節ごとにメインステージを替えるようなイメージで園づくりを行っています。その都度花の入れ替えが発生するので手間はかかりますが、季節ごとにイメージを一新し続けられる点が、この園の魅力だと思います。

── どの季節に来ても違った植物を楽しめるということですね。

長谷川：敷地がさほど大規模でなく、花をエリア別に配置することが難しいため、この時期は藤、次の季節はバラ、続いて花菖蒲、あじさい、スイレンと、メインになる花を時系列で考え、計画的に配置しています。ついカメラを向けたくなるような美しい景色がどれほどあるかによってお客様の満足度は変わってくると思いますので、魅力的な写真スポットづくりにも常に力を入れています。

栃木県指定天然記念物にも指定されている大藤棚

奇蹟（きせき）の大藤

── あしかがフラワーパークの代名詞ともいえる大藤について教えてください。

長谷川：当園には４色の藤があります。ピンク色のうす紅藤、紫色の大藤、白色の白藤、そして黄色のきばな藤。これらが重なり合いながら、１か月間リレーしていくように咲いていきます。大藤は八重の藤を含めて園内に４本あります。１本の藤棚で約1,000平方メートル、畳600畳敷の広さがあり、メインの大藤はこれが２本あるので、広さはその倍になります。

── 圧巻ですね。

長谷川：１本の藤の木からは、約８万の花房が咲きます。このサイズの藤棚は日本でも最大級で、長いものは花房が180cmくらいまで伸び、樹齢は160年以上となります。

── 山間部に自生している藤の木と大藤は、形が異なって見えます。

長谷川：藤には山に自生している「山藤」と、大阪府野田に由来する園芸用に改良された「野田藤」の２種類があり、当園の大藤は後者で「野田の九尺藤」と呼ばれるものです。この大藤は当園の前身である早川農園から移植してきたもので、当時不可能と言われた移植を成功させたことから、「奇蹟の大藤」とも呼ばれています。

── 自生している藤と園芸用の藤との違いは何ですか？

長谷川：自生している藤は、ツルで他の木に巻きつきながら育っていきます。園芸用の藤は、それを人工的に棚に這わせたり、盆栽のように仕立てたりして、花をきれいにご覧いただけるようにしています。大藤の魅力は、その壮大さと日本らしい美しさです。藤の花は上から一輪一輪開花して、最終的に１m以上の長さになります。いちばん下まで咲く前の７分咲きの頃が最も美しく、８分咲き、９分咲きになると上から徐々に散り始めます。全ての花房が一斉に咲くことはありませんが、それがバラのような華やかさとは違う、日本的な美しさにつながっているのだと思います。

冬季に開催される「光の花の庭」は、日本三大イルミネーションにも認定されている

左手に見える管理用の脚立とヘルメット。取材時も木々や草花の手入れが行われていた

── お話を伺って、ぜひ大藤の見頃にまた足を運びたいと思いました。

長谷川：我々が思っている以上に、お客様は花やイルミネーションに思い出をつくってくださっています。歳を重ねてから二度、三度と来園してくださる方や、中にはご親族の写真を持ちながら観覧される方もいらっしゃいます。そういった方々に「またここに来てよかった」と思っていただけるような、その時々の感動をつくり続けていくことが私たちの仕事だと思っています。

植物とともに生きること

── 植物を育てるうえで、天候に左右されることも多くあると思います。

長谷川：毎日屋外で植物を管理していると、気象の変化や温暖化は強く感じます。草木が得意とする温度ゾーンを逸すると、植物に疲労が見えたり、開花期が早まったりします。それらは植物が異常を来す要因にもなり得るので、季節に応じた管理はとても難しいと感じます。2019年の台風19号では近くの川が越水して園内が山側以外全て水没し、その時期に見頃だった花、施設の壁紙や電気設備、お土産品などが全てダメになってしまいました。翌日水が引くのを待ってからスタッフ総出で清掃・消毒をし、8日後には仮オープンまでもっていくことができましたが、こうした自然の脅威や力のようなものは常に感じています。

── 気の抜けないところですね。

長谷川：人が自然に逆らうことはできませんが、自然と共存するという意味では、それらに畏敬の念をもちながら、植物に対しても謙虚な姿勢で接していくことが大切なのだと考えています。

── コロナ禍にご苦労されたことも多かったと思います。

長谷川：コロナ禍に休園した年は、藤がすごくゆっくりと咲いたんです。ふだんであれば一気に咲くところ、緊急事態宣言が明けてお客様が戻ってくるのを待つかのように……。これまで藤は、多くのお客様の歓声の中で咲いてきました。誰もいない園内でずっと咲いている姿は、少し寂しげに見えました。

── 植物の管理を通して大変だったことはありますか？

長谷川：私が管理していたきばな藤が、次々と枯れていってしまうという現象に見舞われたことです。調査の結果、土壌性の病気が原因であることを突き止めたのですが、それでもなお育たず、ほとんどの木が枯れてしまいました。私も樹木医としてなんとかすべく、大学や国の研究機関とともに調査し、やっと復活の兆しがみえてきたのがここ4、5年のことです。諦めずに10年、20年かけて魅力をつくり上げていく、植物にはそういう難しさはあります。だからこそ一瞬の美しさや儚さがあり、綺麗な花を咲かせてくれたときには安堵するものです。

── 学校の花壇や授業で花を育てる際に、大切なことがあれば教えてください。

長谷川：花も生き物ですので、その花に合った環境に植えてあげること、そして、自分が育てる花についてよく学び、観察してあげることが大切かなと思います。植物にとって土はとても大事なんです。お日様も水も大事ですが、人間と同じように根っこが元気であることが重要で、まずはしっかりと土台を作ってから育ててあげてほしいなと思います。

── 最後に子どもたちに向けてのメッセージがありましたらお願いいたします。

長谷川：ネット社会の発展により画面越しに物事を見聞きする機会が増えた昨今、若い方にはぜひ本物の空間（リアル）に触れていただきたいと思っています。興味をもったことが現実世界にあるものならば、実際に目や鼻、そして人間のもつさまざまな感覚を使って体感してもらいたい。映像で見るものと違う、そこでしか味わえない感動がきっとあるはずです。また、この記事をきっかけに、少しでも花に興味をもっていただけたらうれしく思います。花は、人との出会いや物事のきっかけをつくってくれる存在であり、そこに大きな魅力があります。花を通して何かがつながり、それがきっかけとなって花に興味をもってくれる方が増えることを願っています。

あしかがフラワーパーク全景

次代につなぐ 14 の講話 校長先生

池谷英人（いけがや・ひでひと）
一般財団法人静岡県教育会館 理事長

本連載では、学校長を務められた先生が、これまでに学校で子どもたちに語り届けた講話をご紹介します。

第14回は、静岡県教育会館で教育文化の振興に尽力する池谷英人先生が、校長時代に島田市立島田第二中学校でつづった学校だよりからお届けします。学校生活における「別れ」の季節、子どもたちが「新たな可能性」に向けて旅立っていく姿を応援したくなるお話です。

第14回　池谷英人 先生（元 島田市立島田第二中学校 校長）

旅立ちに寄せて

コロナ禍に明け暮れた最後の3年間でしたが、退職後は仕事から完全に離れ、ゆっくりと自分の体力や健康等に向き合いました。現在は、駿府城公園のほとりの静岡県教育会館に勤めています。毎日、吹抜けギャラリーのあるモダンな建物、公園の自然やお堀等の景観、静岡市中心部のアクセスの良さを生かした利活用にゆっくりとゆったりと思いを巡らせています。

教育会館の目的の一つ「教育文化への寄与」を念頭に、静岡県内の風景や歴史等を題材に委嘱した合唱曲「おおいなる川 ～はるかな旅へ～」「いにしえの道」（作詞・作曲：ミマス／編曲：富澤裕）は、教育芸術社からオリジナル合唱ピースとしてリリースされています。作曲家のミマスさんとは10年ほど前に静岡県内で開催された天文観測会で初めてお会いし、親しみやすいお人柄や広く深い知性と豊かな人間性にたいへん感銘を受けました。現在3曲目を委嘱しています。

「おおいなる川 ～はるかな旅へ～」の練習風景。島田市内の公民館にて

♪楽曲をご試聴いただけます♪

「おおいなる川 ～はるかな旅へ～」

「いにしえの道」
（作曲者・編曲者からのメッセージ付き）

「終わりとはじまり」と「別れと出会い」について

生物界で繰り返される「終わりとはじまり」は、35億年前に生命が誕生してからずっと繰り返されてきました。ある生物学者は、生きるものに寿命があることは、多様性のためにたいへん重要なことだと言います。生物は、激しく変わる地球環境で存在し続けるために「変化と選択」を繰り返してきました。地球上の生物は、激しい環境変化の中でも遺伝情報（ゲノム）を変化させて、多様な個体を作ることで生きながらえ「生命の連続性」を維持してきたのです。

ところで、３月は、生徒や保護者の皆様、教職員にとっても別れと新しい出会いが交錯する季節です。「別れ（終わり）」は時に人を悲しみや寂しさに陥れますが、生物界の考え方を引用するならば、「新たな可能性の出発（進化した新たな生命の誕生）」という考え方はできないでしょうか。そのために私たち大人は、子どもたちが激しく変化する社会の中でも生き抜き「変化と選択」を繰り返せるように、家族愛と人間愛に満ちた土台を築いてあげることが必要なのです。

秋から冬～アサギマダラの旅立ち～

11月の島田二中のビオトープでは、アサギマダラだけでなく黄色が鮮やかなツマグロヒョウモンや美しいアオスジアゲハ等が舞い楽しませてくれました。その数も日に日に少なくなり、島田市にも冬がやってきました。島田二中に来たアサギマダラたちも、時に１日200km以上を旅し、なんと1,000km ～2,000kmを越える一生で最後の旅に出ていきます。何を合図に渡り、どうやって目的地に着くのか、なぜ何千キロも渡るのかなど、その旅路に思いをはせて見送ってあげるのもよいでしょう。

島田二中ビオトープに飛来したアサギマダラ

学校に関わってくださった全ての方々に心から感謝

最後の３年間はまさにコロナ禍との闘いでしたが、制限下であっても必死に頑張る子どもたちの姿に幾度となく励まされました。脳科学者の池谷裕二先生の「知好楽（興味・関心こそ学力の原点）」の考え方による、多くの分野への興味・関心を高める校内読書活動や文化活動の推進は島田二中の学力向上につながったように思います。これらの活動は、文理融合の必要性を説いたリベラルアーツの考え方にもつながります。生徒、保護者、ＰＴＡ、学校運営協議会、教育センター等関係諸機関、毎朝校門前で交通指導をしてくれた地域の方、そして、島田二中教職員、学校に関わってくださった全ての方々に心から感謝を伝え、ここに筆を置きたいと思います。

文化祭で力強く合唱する生徒たち

過去に池谷先生が指導されていた合唱部は、今も精力的に活動しています

学校だよりを毎月執筆するにあたり、新しい時代に対応した文理融合を念頭に、情緒的、文学的事象にも科学的な示唆を入れていくことに努めました。また、IT化や効率化を急ぐ社会や、災害や戦争等が頻発する中で、多様性・多文化共生・人権など、豊かな社会や豊かな心につながる芸術（音楽）文化の重要さを発信しました。　（池谷英人）

多くの生徒が所属する吹奏楽部の演奏

上野耕平の

crossing［クロッシング］

第17回

由利高原鉄道鳥海山ろく線

秋田県由利本荘市内を走る由利高原鉄道鳥海山ろく線。羽後本荘駅～矢島駅を結ぶ全長23㎞の小さな鉄道。全線を通してのどかな風景の中をゆったりと走ります。

天気がよければ鳥海山の見晴らしがすばらしい車窓も魅力のひとつ。ここを走る車両はディーゼルエンジンで動く気動車。中には「おもちゃ列車」と名付けられた可愛らしい内装が特徴的な車両も走っており、子どもたちからも人気のよう！

小さくても地元の方の大事な足として走り続ける由利高原鉄道。ぜひ皆さんも乗りに行ってみてください！

文・写真：上野耕平（うえの・こうへい）

東京藝術大学器楽科卒業。第28回日本管打楽器コンクールサクソフォーン部門第１位・特別大賞（史上最年少）。2014年第６回アドルフ・サックス国際コンクール第２位。17年度第28回出光音楽賞、18年第９回岩谷時子賞奨励賞受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。The Rev Saxophone Quartet、ばんだウインドオーケストラコンサートマスター。NHK-FM「×（かける）クラシック」の司会やテレビ「題名のない音楽会」「情熱大陸」など、メディアへの出演も多い。鉄道と車をこよなく愛し、深く追求し続けている。

Information

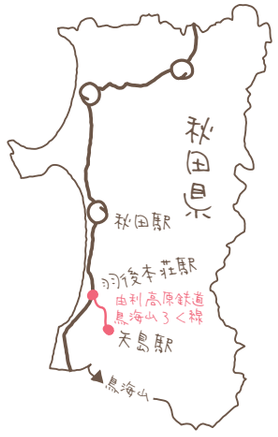
◇上野耕平コンサート情報はこちら。

https://uenokohei.com/concert/

（上野耕平オフィシャルサイトより）

編集部メモ

「おばこ号」の愛称で親しまれている由利高原鉄道鳥海山ろく線は、
タブレットと呼ばれる金属製の円盤やスタフ（通票）を交換することによる、
昔懐かしい運行方式が採用されている。
鳥海おもちゃ列車は、“列車に乗った瞬間…そこはもう「おもちゃ美術館」”
をテーマに、2018年7月より運行が開始された観光列車。
由利高原鉄道ではこの他に、秋田おばこ姿の列車アテンダントが乗務する
「まごころ列車」や、事前予約で自転車を持ち込むことのできる「サイクルトレイン」など、
多種多様な列車が走っている。



SDGs 特集

Think Globally, Act Locally Vol. 5

循環する暮らしを目指して

小川 慈　「くるん京都」メンバー／医師

“Think Globally, Act Locally”――地球規模で物事を考え、身近なところから行動を起こす――。
よりよい未来をつくっていくために、私たち一人一人にできることは何か？
この特集では、さまざまな分野の方にお話を伺いながら、そのヒントを探ります。
第５回は、プラスチックごみの問題について考えながら、マイ容器や量り売りでの買い物を提案している「くるん京都」の取り組みを紹介します。
インタビューに答えていただいた小川慈さんは、学生時代、合唱指揮に打ち込んできました。
その経験が「くるん京都」の活動や考え方にもつながっています。

Profile　小川 慈（おがわ・めぐみ）

マイ容器を使った買い物の普及に努める市民プロジェクト「くるん京都」のメンバー。2019年、自宅から出るプラスチック容器包装ごみの多さを認識したのを契機に、環境問題や量り売りに関心を持ち、SNS等での情報収集を開始。2020年、X（旧ツイッター）上で「量り売り潜在需要調査」を実施し、300以上の回答を分析する中で「くるん京都」立ち上げの着想を得る。2021年４月くるん京都発足。６歳からヴァイオリンを始め、高校・大学では合唱部に所属。現在は脳神経内科の医師として勤務している。

くるん京都　kurun. kyoto

ごみの少ない、快適で身軽な暮らしを目指し、マイ容器や量り売りで買い物ができるお店を探してマップにまとめているほか、自治体と連携したセミナー開催や実際に買い物を体験できるイベントなども企画している。

https://www.kurunkyoto.org

マイ容器対応のお店を探せる買い物マップをご覧いただけます。
京都市内を中心に約90店舗が登録されています。
（2024年２月時点）

https://www.kurunkyoto.org/map

SNSでのアンケートを通して

── どのようなことがきっかけで、ごみの問題に関心をもつようになったのですか？

小川：毎週たくさん出るプラスチックごみを眺めながら、このプラスチックたちは別の製品になっていたら長く使われていただろうに、容器包装になったばかりに使い捨てられるんだなと思ったら、とてももったいなく感じたんです。リサイクルもよいけれど、そもそも減らすことはできないのだろうかと考えたのがきっかけです。皆はどう考えているのか知りたくて、X（旧ツイッター）でアンケートをしてみました。その中で、「マイ容器で買い物ができたらいいのにね」という声がいくつもあったんです。

── 日本ではあまり目にしない買い物スタイルですよね。

小川：そうですね。近所の商店街で試しにやってみようとするも、勇気がなかったので１回目は普通に買い物をして、「次来たときに、こんな容器に入れてもらうことはできますか？」と聞くところから始めました。顔を覚えてもらっているうちに再訪問するんです(笑)。そんなことを一人で繰り返しているうちに、「このお店はマイ容器OK」という情報が事前に分かるだけでハードルが下がるのになあと思うようになって。

── 買い物のたびにお店の方に尋ねるのは少し躊躇してしまうかもしれません。

小川：Xのアンケートで「どうしたらマイ容器での買い物がしやすくなるか？」という質問を投げかけると、いろいろなアイディアが集まりました。「店頭にステッカーなどの目印があるといい」「あらかじめそういうお店が分かるようマップにまとまっているといい」──そうだよな、と。皆の意見を読みながら、お店をつくるのは自分にはできないけれど、情報を集約することだったらできるかもしれないと考えたんです。

── お店側にとってもメリットがあるのでしょうか？

小川：マイ容器や量り売りに興味はあるけれど何となく踏み出せないお店も多いですよね。「どんな人がどんな商品をマイ容器で買いたいか」という情報を集めたら後押しになるかなと思い、アンケートのデータを参考にしてもらうこともありました。お店の方と話していると、実はトレイなどの容器代も負担になっていることが分かったんです。京都のとあるスーパーマーケットの店長によると、市内にある３店舗でパッケージ包装の費用が年間1,800万円。これを半減するだけでもお客さんや従業員の待遇に還元できるかもしれないという話が出ました。

── 買い手と売り手のどちらにも利点がありそうですね。そもそも、ごみを減らすことで社会全体にはどんな効果があるのでしょうか？

小川：財政にもよい影響があります。京都市では、2000年には年間約82万トンのごみが出ていましたが、分別やリサイクルを進めて2019年には約41万トンに半減したそうです。ごみ処理施設の稼働を５つから３つに減らせたことで、ピーク時に比べ年間で約144億円の節約ができた。年にもよりますが京都市の１年間の教育予算がだいたい1,000億円なので、15%ぐらい賄えることになりますよね。限られた財源を、せっかくなら何かを「育むこと」に使えたら建設的ではないでしょうか。

インタビューの様子

多様なバックグラウンドをもつ仲間とともに

── 現在は10名ほどのメンバーで活動していると伺いました。

小川：あるとき、温めていたアイディアをとあるお店の店主に相談したら、お客さんの中で興味がありそうな人たちに声を掛けてくれたんです。もともと知り合いではなく自己紹介から始まった仲間たち。年代や国籍もさまざまです。

「くるん京都」のメンバー

── いろいろなバックグラウンドをもったメンバーが集まっているのですね。

小川：デザインや写真が得意なメンバーにはホームページの作成を手伝ってもらったり、アメリカ出身のメンバーには英語の説明書きをチェックしてもらったりと、それぞれの得意分野に助けられています。協力店の店頭に置く目印のプレート【右上の写真】も、メンバーから「レーザーカッターを使えるところがあるよ！」という情報を教えてもらい作ったものです。

── 海外出身のメンバーから、日本とは異なる事情や取り組みについて聞く機会もありますか？

小川：例えばドイツでは、リユース容器を普及させている企業があって、いろいろなお店に展開しているそうです。容器を借りて買い物し、返却するとデポジットが戻ってくる。買ったお店以外のお店に返してもよいので利便性が高い。実は京都にもリユース容器を扱う会社があり、祇園祭で屋台に貸し出して、使い捨てを減らそうという取り組みが始まっているんですよ。

「くるん京都」オリジナルの手作りプレート（撮影協力：タルティーヌとコーヒー はんな）

── 2023年には、京都市温暖化対策室の一事業として「くるん京都」主催のイベントが行われたそうですね。

小川：『はじめよう、ごみを生まない小売』というタイトルでセミナーを開催しました。量り売りを展開するスーパーマーケットの方に講師を依頼し、どうしたらパッケージフリーの買い物が普及するのか、問題点やアイディアをレクチャーしていただきました。また後半では、小売店の店主と消費者によるパネルディスカッションを行いました。普段どのような苦労を抱えているか、どう解決したらよいか、消費者目線ではどうか、といったさまざまな話が飛び交いました。

── 参加者の感想はいかがでしたか？

小川：普段お店どうしのつながりはあまりなかったそうですが、「これを機にリユース容器を共有してみよう」という提案が出たほか、店主のLINEグループをつくって「今後もアイディアを交換しよう」といった動きがありました。また、消費者の方からは、「こんなに容器代がかかっていたとは！」という驚きの声や、「こうしたらごみを減らせそう」といった意見も出ました。セミナー後も続くつながりができたのはうれしかったです。

今につながる合唱指揮の経験

── 学生時代の経験や現在の職業は、「くるん京都」の活動に影響していますか？

小川：大学時代は学内の合唱団で指揮者をしていました。指揮者は一見目立つけれど、演奏者が音を出してくれることで初めて音楽をつくることができる。自分のもっている知識や技術よりも、皆がもっている魅力を引き出すのが指揮者の重要な役割で、それがとてもおもしろいと感じたんです。これは本業である医者の仕事も同じで、患者さんがその人らしく暮らしていけるように手助けする立場だと思っています。「くるん京都」も、私たちの活動自体で直接的にごみが減るわけではないけれど、マイ容器で買い物をすることの心地よさが浸透して、少しでも多くの人に「やってみよう」と思ってもらい、最終的にごみの削減につながることが目標です。合唱指揮の経験も、「くるん京都」の活動も、やりたいことは通底していると感じます。

── 「くるん京都」がきっかけとなって、地域も活性化されそうですね。

小川：まさに地域活性化の一つの媒体という位置付けです。消費者はもちろん、地域のお店が盛り上がったらよいですよね。「くるん京都」の“くるん”は、“循環”や“輪”をイメージしたネーミングで、人と人の輪、お店とお店の輪が循環経済につながればよいなという願いが込められています。私たちの活動を知った山梨県の方が「くるん山梨」を始めたという事例もあり、京都以外の地域にも少しずつ輪が広がっていけば、さらにうれしいです。

── 何か子どもたちが楽しみながらできることはありますか？

小川：自分の目の前にあるものが、どこから来て、どこに行くのか、素朴に興味をもつところから始めるのはどうでしょうか。「これはどこで作られて、ごみになってどこへ行くんだろう？」と調べてみたり、考えたりするだけでも学ぶことが多いはずです。さらに関心を深めるのであれば、実際に体験する機会もあるとよいですよね。例えば「くるん京都」では、「マイ容器ピクニック」というイベントを企画していて、初めてマイ容器で買い物をする方とメンバーが一緒に商店街を回り、京都御苑で昼食を食べながら楽しく語り合う時間をつくっています。子どもたちにも、コミュニケーションを通して学べる場があるとよいですね。無理はせず、楽しみながら学ぶことがいちばんです。

マイ容器での買い物の例。自宅にあるタッパーや弁当箱などを利用する人が多い。パンを巾着袋に入れるアイディアも

SDGsとは？

Sustainable Development Goals（持続可能な開発目標）の頭文字を取ったもの。2030年までに貧困や飢餓、福祉、教育、エネルギー、気候変動、平和的社会等の課題に対して解決策を見いだし、持続可能でよりよい世界を目指すための国際目標です。国連サミットで決められた17のゴール・169のターゲットで構成され、地球上の誰一人として取り残さないことを誓っています。

One day, one moment［ワンデー ワンモーメント］

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ
フォトグラファー。日本写真家協会（JPS）、日本舞台写真家協会（JSPS）会員。米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。人物写真とステージフォトを中心に撮影。ジャケット写真、雑誌の表紙・グラビア、各種舞台・音楽祭のオフィシャル・フォトグラファー。官公庁や経済界の撮影も多数。
https://hidaki.weebly.com　Instagram：tomokohidaki_1,2,3

19枚目

二度とない色

夏の夕暮れ。ヴェネツィアの路地を抜け、賑わいの中をジグザグに歩き、サンマルコ広場近くの波止場で足をとめた。

波音とゴンドラの軋（きし）みの音だけが聞こえる。段々と、何色、と明確に表現できないような色合いに深まっていく波と空に包まれ、波立っていた心が次第に凪（な）いでいく。昼間は力強く感じた聖堂も、波と空に溶けるように、優しい薄紫色に染まっていく。

昔の人もきっと、この美しさに見とれただろう。でも今日のこの色合いは、この日この瞬間だけのような気がする。遠い未来の誰かが歴史を振り返るときも、その中の一日を切り取れば、刻々と変化する、二度とない、この波の色のような瞬間が、静かに脈々と重なっているばかりなのかもしれない。

Contents

04 ［連載］日本めぐり 第９回 長谷川広征（あしかがフラワーパーク）

07 ［連載］次代につなぐ 校長先生の講話 第 14 回 池谷英人

10 ［連載］crossing 第 17 回 上野耕平

11 ［連載］SDGs 特集 Think Globally, Act Locally Vol.5 小川 慈（くるん京都）

14 ［連載］フォトエッセイ One day, one moment 19 枚目 ヒダキトモコ

編集後記

令和６年能登半島地震により犠牲となられた方々に、
謹んでお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆様にお見舞い申し上げます。
皆様の安全と、被災地域の一日も早い復興を祈念いたします。

＊

『bouquet［ブーケ］』No.19をご清覧いただき、ありがとうございます。
今号の連載「日本めぐり」の舞台は栃木県のあしかがフラワーパークです。
取材時に訪れたイルミネーションイベント「光の花の庭」は、大藤や季節の花々に
負けずとも劣らない息を呑む絶景でした。これらを管理する長谷川広征さんの
「植物も人も根っこが元気であることが大切」というお話が印象に残っています。
お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全ての方に、
心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction＆Design（表紙・本文）：中澤美羽
写真提供：（株）足利フラワーリゾート
DTP：清新社　/　印刷：新日本印刷
製本：ヤマナカ製本

No.19

https://www.kyogei.co.jp/

bouquet［ブーケ］ 発行者：株式会社 教育芸術社（代表者 市川かおり） 〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
Tel. 03-3957-1175（代） Fax. 03-3957-1174

© 2024 by KYOGEI Music Publishers. Ⓟ -24 本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられています。